

緑丘



社団法人 緑丘会

緑丘

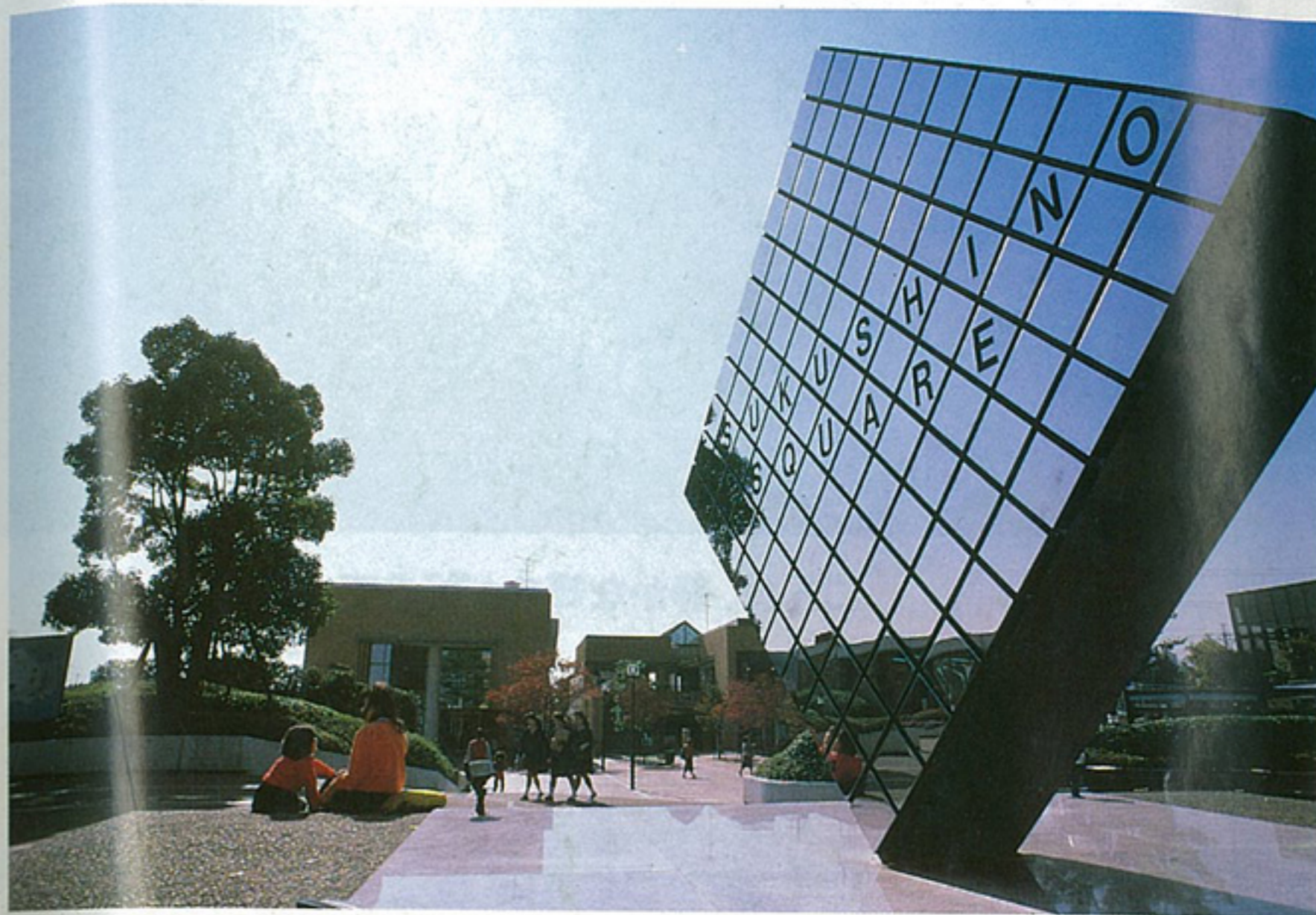
(第六二号)

緑丘会東京事務所

東京都豊島区東池袋三一一一サンシャイン60(57階)
電話 03(981)2340

社団法人 緑丘会

21世紀へ 豊かさを深める——とうきゅうグループ



生活に根ざしたトータル・ライフ・エンジニアリングへ

成熟社会にあつて、建設業は、単に構造物をつくりあげるだけでなく、将来を見すえながら、社会の必要とするものを描き出し、その実現のために、ソフト・ハードのあらゆるノウハウを集約さ

TOTAL LIFE ENGINEERING

せなければなりません。さまざまな事業発想に生活者志向を深め、人々のニーズに適応した商品開発をはかることは、業種業態を問わず大切なことです。私たちは、その役割を、「トータル・ライフ・エンジニアリング」の立場から捉えます。



東急建設株式会社

取締役会長 八木勇平(昭和8年卒業)
〒150 東京都渋谷区渋谷1-16-14
渋谷地下鉄ビル TEL.03(406)5111

緑丘

第47回通常総会報告	2
第48回通常総会のお知らせ	8
●75周年記念シンポジウム特集●	
シンポジウム「今、小樽商大を考える」	11
●特別寄稿●	
伊藤整に関する12章	杵渕 雄 28
●實方先生追悼●	
實方元学長を悼む	若山永太郎 42
弔 辞	藤井 栄一 43
弔 辞	朝田 誠 44
實方先生をしのぶ	渡辺 胖吉 45
手 紙	木村 章三 47
物故会員	50
●随想・手記・短歌・俳句●	
わが青春—ボート部草創のころ	三浦 信一 51
『第二の祖国リチャード・ストーリーと日本』	
出版について	D・ストーリー 57
石狩開発考	木村 章三 61
北に未来を	浦島 久 64
「ドンちゃん」道場七郎君	鎌倉 啓三 67
おカネ・マネー	山口 文雄 72
奮起させる土壌づくり	鍵谷 英之 76
境涯七句	前 典次 77
句苑緑丘	78
学園だより	80
支部だより	84
同期会だより	97
緑の紙風船	113
会員移動通知	116
会館利用日誌	126
編集後記	128

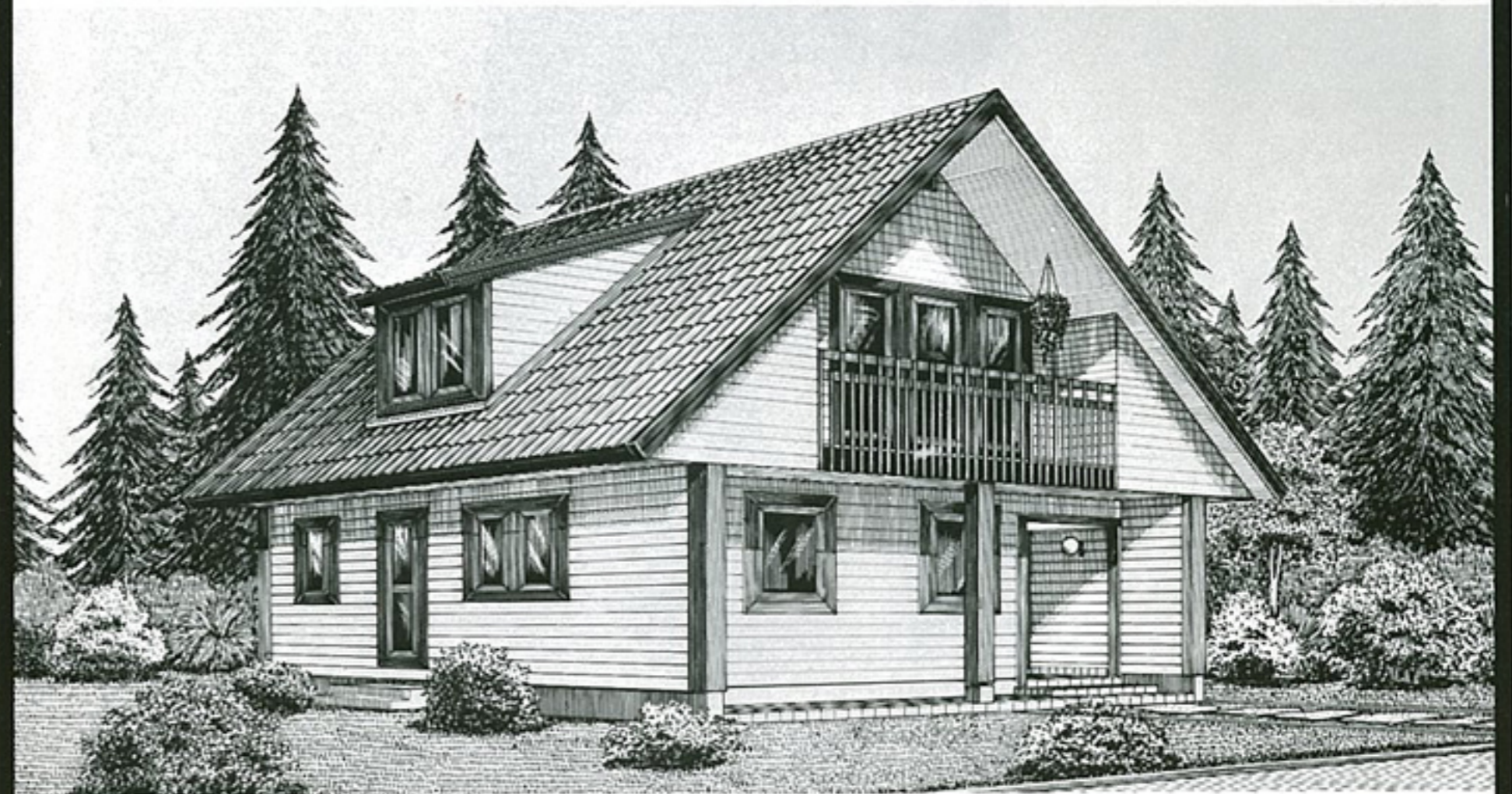
表紙画 尾形圭介 (二紀会委員・昭34卒)

スウェーデンハウス

Sweden House



歴史と風土に磨かれた本物の輝き。 スウェーデンハウス。



完成予想図
(HT-9Bタイプ)



お問合せ先

スウェーデンハウス 株式会社

北海道支社 / 〒060 札幌市中央区南1条西5丁目 郵政互助会札幌ビル4階 ☎(011)251-1881
本社 / 〒100 東京都千代田区丸の内2-2-2丸の内三井ビル内 ☎(03)216-0423(代表)
東証1部上場

設計監理



株式会社 トーモク

一級建築士事務所 東京都知事登録第22032号
〒100 東京都千代田区丸の内2-2-2丸の内三井ビル4F ☎(03)213-6816

取締役会長 手取貞夫(昭和17年卒)



實方正雄 元学長ご逝去

昭和61年10月10日午後6時29分

入院療養中、心不全のため、享年81歳

講演会」というデックカイ看板を見てオレもとうとう文豪の仲間に入れてもらったかと思つて胸がドキドキし、終つてから武者小路氏に「おかげ様で文豪の仲間に入れて頂きました」と礼を言つたという。当時から見ると随分偉くなった筈だが、文豪にしてはまだカンロクが足りないよう。雑文屋と称して軽いものをアレコレ書きすぎたせいでもあろうか。しかし沢山書き残してくれたことは私らにとつて有難いことである。

そうした整のフレイドリヨクの跡をなぞることが出来て、わが余生も又楽しといったところであるが、遺されたものの余りにも多いのに比べ、残された余生の少きを嘆かざるを得ない。彼の著作の中でそうした老心を限りなく楽しませてくれるものに、昭和三十六年の『ヨーロッパの旅とアメリカ生活』がある。

前半は昭和三十三年九月、日本ペンの代表となつてパリやタシケントのA・A会議に出席のため出かけ、終つて夫

翌年夫人を先に帰国させ、自分は一人マルセイユからデンマークの貨物船に乗り帰国した時の紀行であるが、この五十日間の船旅がケツサクである。

特にもう日本も近いというタイのバンコックで有り金全部はたいて、中国風の小舟を買つたというのである。やつと出帆の間に合い船上で舟の命名式。あまり例のないことである。厳肅かつ盛大裡に船長の名前をもらつてエリク丸と命名する。この奇想天外な催しに乗客たちは大喜び。(この舟は昭和三十四年頃野尻湖では一番スマートであつたという)

次に船の予定が変更、整の故郷小樽に直行と聞いて乗客たちは歓声をあげる。

三月二十九日、いよいよ小樽港である。整の胸は少年の日と同じように高鳴る。岩壁には七十五歳の母タマさんはじめ一族郎党の出迎え、感動のシーンとなる。夜はかねてのご要望に応え海陽亭に全員ご招待し、芸者の総揚げ(あまり若くないのが五人)でスキヤキ・パーティーの大盛況となる。終つて北海ホテルの

キャバレーに移りダンス・パーティーとなり、懐かしい小樽での第一夜が更けて行くのであつた。

全く楽しい話である。読む度に老心にみに雀躍、こんな旅を自分も今生の思い出にせひ一度してみたいという妄想にかられる。

遂に私も昭和×年の二月九日、貨物船「恍惚号」に乗つてマルセイユ港を出帆することとしよう。途中は一切一九五九年のコレア号と同じ。但しどこかの新聞社に原稿を書き送るといふことはない。バンコックで四十ドルの小舟を買い盛大な命名式で「ひとし丸」と名付ける。

予定変更でいよいよ今日、小樽港へ。

この時北海道は早春の季節。石狩湾はモヤがかすみ「灰色の年老いた波」も春めいた感じであつてうねっている。小樽の山々が見えてきた。まだ雪がどっさり。ゴロタの丘が見えてくる。

そうだ、海の捨児となつた整が眠りながら浪間を漂つていとすれば、この辺であらうか。(昭六二、九、二〇)

實方元学長を悼む

緑丘会大阪支部

支部長 若山 永太郎

この度の實方正雄元学長のご逝去は、先生と共に関西に住む緑丘人にとって、愛惜断ち難く、日数を経るに伴って一層先生の偉大さに心うたれ、心からご冥福をお祈り申し上げる次第です。

實方先生は学者としても極めてすぐれた方でありました。小樽高商卒業後東北大学へ進まりましたが、在学中に高等文官試験のすべての科目に合格されました。大学院修了後同校講師、助教を経て大阪市立大学教授に迎えられ就任されました。

この實方教授を小樽商大の学長として招聘するにあたり、松尾教授の来阪など大学側からも極めて強い要望がありました。しかし、緑丘会としても強く懇請いたしま

した。特に故椎名幾三郎先生及び實方先生とクラスメートの石田平八氏（当時緑丘会大阪支部長・サッポロビール常務）の強い説得もだし漸く実現しました。

實方先生にしてみればご家庭に病弱なご夫人があり、研究の中断も覚悟せねばならず、容易ならざる岐路に立たれたわけですが、母校を愛する人々の熱意に、先生ご自身の母校愛がうずいて重大な決意をされたのでありましょう。

このようにして、昭和四十一年以後十年間、学問とご家庭のみならず、経済的にも多大の犠牲を先生に強いる結果になりました。

しかし時の流れは学園紛争の最盛期に入り、学長のご心痛は極限に達し、そう

した受難の日々がどれほど先生の寿命を縮める原因になったことであろうかと思ふとき、いたたまれない気持ちであります。

先生の資質温厚、その謙虚でもの静かな応待は聖者とも言うべく、三十数年にわたりキリスト教会の最長老として市民の敬愛を一身にあつめたご生涯を想うとき、無言の教訓をわたしどもに垂れ、自らの生涯の貴重な部分を、母校に捧げられたと申すほかございません。その先生のお心に対し、緑丘人たる者、直接に教えを得たるや否やを問わず、何をもちて報ゆるべきかを反省すれば、まことに取返しのつかないことをお願いしてしまつたとお詫びせざるを得ません。

まゝいまではただ、ご健康であった頃、緑丘会の集りには必ずご出席になられ、乾杯の杯を手にしたままもの静かに語られた

弔辞

謹んで實方正雄先生の御霊前にお別れの言葉を申し上げます。

先生が私共小樽商科大学の教職員と学生全員の希望を容れて、大阪から先生の母校でもございます小樽商大の学長として北海道にお戻り下さいましたのは昭和四十一年の春でございました。それから十年の長い間、大学にとってはもっとも厳しい時代に、私共のリーダーとして学内をとりまとめ、大学の発展に寄与して下さいました。特に、その間に大学院研究科を創設され、自ら講義を御担当下さいました。更に昭和四十年半ばから学内が騒然とするなかで、正常な研究と教育

あのお姿をしのび、緑丘人はすべからく清く正しく進むべし、とわが心に願うばかりであります。

共が大学の使命をとまかくも果し得たのは先生が大学の中心にあって、私共に正しい方向を示して下さいましたからでございます。しかしその為に先生が御自身にも、また家族の皆様方にも、多大の犠牲を要求され健康を害された事について私共は心からお詫びせねばなりません。

先生はもっとも困難な時代に大学の中心になられました。これも先生の研究者としての姿が私共に自分達の生き方の模範を示して下さい下さったからに外なりません。

小樽商科大学

学長 藤井 榮一

先生は小樽高等商業学校を経て東北大学に進まれ、御卒業後間もなく助教として後進の指導に当り、大阪市立大学に移られた後は教授として教育と研究に当られ、また法学部長および学生部長として特に重い責任を果たされました。小樽商科大学に於ては、学長として大学行政を担われたのみでなく、法学および商法の講義を自ら担当され、更に研究会に於て教官の指導にも努力して下さいました。

先生がお示し下さいました深い学識と責任ある態度とは、私共すべての者に人間としての生き方を御教え下さいまし

吊 辞

た。先生が教室で指導して下さいました。先生が教室で指導して下さいました者達はもとよりのこと、先生の数多くの著書と論文によって勉強して参りました多数の後継者が先生の遺業をついでおり内さういふことも、大学の奨励がなければならぬ。先生は、塚口教会の母胎「基督教塚口伝道所」の時代より、桑田牧師を助け、日曜学校の校長として御活躍なさっておられました。昭和二十四年六月塚口教会が創立され先生は初代の長老に選ばれ、以来三十七年の間、常に最も忠実な模範的な信徒として教会生活を守って来られました。

ます。それは法律と法学の分野だけに限りません。先生の人格から学んだ者達が、今や、日本だけでなく至る所で勉強し、仕事に励んでおります。先生が学

は常に微笑を絶やさず、物静かで、柔和で、そして筋の通ったクリスチャンとして、私共を導いて下さいました。先生は「愛は高ぶらない。誇らない。不作法をしない。」……という聖者の御言葉通りのお人柄であられました。

又小樽商科大学長としてのめざましい御活躍などについては、先生は教会の中では殆んどお話しになりませんでした。学園紛争の真唯中での学長としてのご心労、ご心痛はさぞ大変なことで拝察いたしておりました。

朝田 誠

界に残されたご功績は永久に消えませぬ、どうか安んじてご瞑目下さい。

昭和六十一年十月十三日

その頃より先生の血圧は次第に高くなって来ておりましたが、昭和五十七年五月、脳卒中発作がおこり、その結果、先生は右半身不随にされました。先生は一生懸命リハビリテーションにはげまれ、かなりよくなっておりましたが、不幸にも、昭和六十年三月、第二回目の発作が脳の反対側におこり、先生は、手足、左右ともご不自由の身体になってしまわれました。同時に喋ることも、食べることも出来なくなり、栄養は毎回鼻から管を入れて、それを通して補給するという状態になられ、以後ずっと入院生

活を続けておられました。その上、昨年、ご長男正昭氏が亡くなられ、お身体のご不自由な奥様のことを思う時、私は「灰の中にすわった」とかかれていますヨブの物語りを思わずにはおれませんでした。

併しそれにも拘らず、先生はお気分のよい時には、松木先生のお説教をテープ

できいておられました。

先生にとっては「この世を去ってキリストと共にいること」がむしろ願わしいことであつたかも知れませんが、私供にとっては、先生があのように生きておられるという事そのこと自体がキリストの生ける証しであり、何よりの励ましでありました。

先生が今はすべての肉体の苦しみから解き放たれて、永遠の平安の中におられることを思い、神様に感謝いたします。

残された奥様始め、永い間ほんとに手厚い看護をして来られた御遺族の方々の上に主の限りないお慰めがありますように祈ります。

昭和六十一年十月十三日

實方元学長をしのぶ

渡辺 祥吉 (昭和二年卒)

昭二会の岡田幹事から、實方元学長のご逝去の電話をもらったのは十月十一日の午後であった。耳を疑った私はすぐ實方さんのお宅の電話をしたが、残念ながらそれは本当であった。即ち十日の午後六時二十九分、心不全と言うことであつた。

翌日尼崎の御宅に伺ったが、いつものあの温顔の写真の下で既に柩に納まった

實方さんであった。御遺族の方は、特に柩の窓をあけて下さり、御生前と変わらぬお顔に接したのであった。

御葬儀は十三日午後一時より尼崎市の塚口教会で行なわれた。葬儀には藤井商科大学長が小樽から飛んで来られて弔辞を述べられた外、大阪市大、関西学院大からも学長方が見えられて、實方さんの人徳と業績を称える弔辞を述べられた。

實方先生は小樽高商在学中は第一寮に居られ、私は自宅通学であつたし、クラスも部活動も一緒でなく、合併教室の出入りの場合にあの、当時から端正なお姿に接するだけであつたし、あまり詳しくは存じ上げてなかった。しかし外国部の仕事をされ、フランス語の他ドイツ語も併せてやっておられたし、三年の時は卒業アルバム作成委員としても御尽力い

ただいた。

先生は高商の卒業は首席であった。そしてすぐ東北帝国大学に入られたが、その卒業までに、当時の高等文官試験、即ち行政、司法、外交のすべてに合格された。そして十一年、大阪商大に來られてからは「金約款論」の論文で法学博士となられた。首席卒業と言うのも大変なことだが、之は毎年一人は出る訳であるから珍しいことではないが、今述べたような実績をあげると言うことは、とても人間技ではない。博士となられた時、在大阪の同窓で祝賀会を開いた時、先輩はその業績を讃えたが、先生は「いやこれは、只他の人がやらないものを手がけただけのものですから」と軽く言われたことを今も覚えている。

先生は戦後懇請されて母校の学長に就任された。当時は夫人の御病中のことであり、まだ学者としての仕事もあったと思うが、それらを押しきって、母校のため、学生のために赴任された。そして初登庁の時は、あの地獄坂を全学生が並ん

でお迎えしたと聞いた。続いての学生問題解決に情熱を注いで解決されたのであった。

先生は御発病以前は、熱海その他で毎年行われる昭二会にもよく出席され、母校の事情等を説明された。この昭二会で五十一年に作った会員名簿は卒業五〇年記念として作った立派なものであるが、その中で全会員は「一言」と言う短文を書いた。その中で先生は、「自分には厳しく、他人には温かく」「学問には厳しく、学生にはやさしく」「一隅を照らす灯となれ」「常に希望を」と書いていられる。これは観念論ではなかった。全くその通りを實行されたのであった。

先生は五十七年脳梗塞を病まれ、一応回復されたものの、六十年三月第二回目の発作があつて入院された。私がお見舞に上った時は、こちらがお話をするには可なりお聞きとりになられたようであったが、御自分が話すことは非常に困難のようで、そう言う時は本当に口惜しうで、涙をためていられるようであつ

た。

今年の正月には可なり快方に向われ、自宅に帰っていますと御家族からお葉書を書いていたので安心して昭二会にも連絡しておいたのであるが、急にこのように天に召されることになったのは誠に残念であった。まだなされる仕事もあったのでしように。我々はもう直接先生のお話をきくことは出来ないが、これからもどうか天国から見守っていて教えて下さい。

(昭二会合掌)
鄭正 報吉

昭二会合掌
鄭正 報吉

先生は戦後懇請されて母校の学長に就任された。当時は夫人の御病中のことであり、まだ学者としての仕事もあったと思うが、それらを押しきって、母校のため、学生のために赴任された。そして初登庁の時は、あの地獄坂を全学生が並ん

手啓 この名が実方先生に聞しの高麗路のありかとういふは、お蔭様で中部

の意を体し、木塚長殿の御氣持を代行して、庶事勤めをせよといふは、お蔭様で

前夜祭はご自宅でも、また、若山支那長社用不社の存、支那特許長とこのことを代行

神戸の水垣支那長社用不社、堀尾 茂(56)氏と同道、実方夫人とこのお力の謙二氏に終止

からのお悔みの御持物を申あげました。夫人は杖で歩行されるように、ご不自由ですが、極人という

ことは、ごいけません。十五日午後一時から二時間にわたる、式は、美しく厳かな空気で、心洗

われる思いがしませんでした。予愛は二百数十通の由ですが、三通は、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、

の英文は、心のこもつたよい文面と感ぜられました。他の二通は、東北大学と大阪市の関係と、思ひ

ました。又、お蔭様で、若山支那長社用不社、若山夫人が、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、

を、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、

は、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、

渡辺祥吉氏(53)市橋孝一氏(55)山内孝直氏(56)角响事氏(57)等、お蔭様で、お蔭様で、

ました。予愛は、五人の、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、

く、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、

榎本夫人と、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、

榎本夫人と、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、お蔭様で、

中央行全日空に送るべく、真由の卒を山内君と木村君同乗、伊丹空港より
 小樽商学長を囲み、軽食と共にながらつて得振興、高次強化のつて情報
 交流をいたしました。小樽商学長は何かと真創に南の取組んてくわさる。真創な
 方かと、感銘いたしました。

同封の予辞二通は、実方家から拝借した。山内君が写したものを下す。他の三件
 は、文書のと実方家の受取のつておりません。山内の携帯テレレコーダーに
 記録してそのものもつていまして、南の取組んてくわさる。結上流に載せる
 に多すぎるとかと思ひ、先生の空想と近況が察知出来る資料として送る。か
 かと思つてお届せします。別に渡辺祥吉先輩に1000字程の苦言の
 の思ふを書いて送るよう頼んでありまして、渡辺氏からその部へ送る
 れる筈です。

以上の報告がなれた、理事長殿をはじめ各役各位の一帯のつてお祈
 りをお願い致します。

昭和五年十月十一日

本村音一

音一

実方正雄葬儀式順序

奏樂	招司	讚美	聖書	祈禱	讚美	式辭	祈禱	讚美	弔辭	挨拶	祝禱	告別
奏樂	招司	讚美	聖書	祈禱	讚美	式辭	祈禱	讚美	弔辭	挨拶	祝禱	告別
三三	五二	三三	三三	二八	二八	四〇	四〇	四〇	五三	五三	五三	五三
三三	五二	三三	三三	二八	二八	四〇	四〇	四〇	五三	五三	五三	五三
三三	五二	三三	三三	二八	二八	四〇	四〇	四〇	五三	五三	五三	五三

略歴

明治三十八年六月二〇日千葉県において実方謙蔵・都弥の四男として生まれる。千葉県立成東中学校、小樽高等商業学校を経て、昭和五三年三月 東北帝国大学法文学部法律学科卒業。なお在学中に、高等文官試験行政科・司法科・外交科のすべてに合格。
 東北帝国大学専任講師、同助教授、大阪商科大学助教授、同教授、関西学院大学教授、大阪市立大学教授、同法文学部長を歴任。
 昭和四一年二月 大阪市立大学教授 退任。
 昭和四一年二月 小樽商科大学学長 就任。
 昭和五一年二月 小樽商科大学学長 退任。
 大阪市立大学名誉教授、小樽商科大学名誉教授、法学博士。

(塚口教会資料による)

昭和五一年四月二九日 勲二等旭日重光章を叙勲さる。
 昭和五年四月二〇日 岩崎ハルと結婚、二男一女。
 長男 実方 正昭 (死去) 孫一人。
 次男 実方 謙二 孫二人。
 長女 玉真恵美子 孫四人。
 昭和三年五月二一日 仙台東一番町教会において、萩原信行牧師より受洗。
 昭和二四年七月三一日 塚口教会に転入会、二四年度、四四年度、五一年度、五八年度長老選任、五九年度より名誉長老として今日に至る。
 昭和六〇年三月ごろより身体に異状を覚え、入院療養につとめるも、昭和六一年一〇月一〇日午後六時二九分 心不全のため死去、享年八一歳。